

学級集団を支えるチーム支援のあり方

—不登校の予防を中心として—

高知市立新堀小学校 教諭 武田 須磨

現在、不登校の問題は教師一人の対応では抱えきれない状況になってきている。予防的な観点から、いろいろな人間関係づくりの手法により、一人一人の児童にとって居心地の良い学級になるために仲間づくりをT.T.で取り組み研究を進めてきた。複数の教師によるかかわりが、居心地の良い学級づくりにもたらす効果を探った。複数で児童の人間関係づくりに取り組むことは、教師同士の児童の見取りを深めることにつながった。また、児童の問題を一人で抱え込まずにチームで支援していくための資料として学級のSOSサインを見逃さないためのチェックリストを作成し、他の教職員、関係機関とどのように連携していけばよいかについて考察した。
キーワード：人間関係づくり、チーム支援、不登校予防、連携、チェックリスト

1 はじめに

本県の平成16年度の不登校児童生徒の数は減少傾向にある。しかし、依然全国と比べ高い割合となっており、不登校問題は本県の大きな教育課題となっている。

不登校は、子どもの気質に加え、学校環境、家庭環境の3つの要因が複雑に絡み合って起こると言える。平成16年度の文部科学省が行っている教師への調査結果(2005¹⁾)から、不登校のきっかけとして、本人の問題に起因、家庭生活に起因、学校生活に起因が多くあげられている。児童生徒を取り巻く社会環境や家庭環境が大きく変化しており、対応の難しさが増してきたのではないだろうか。しかし、現代教育研究会による「不登校に関する実態調査」(2001²⁾)を見ると、平成5年度に中学三年生で年間30日以上欠席した生徒を20歳になった時点で調査した結果では、不登校のきっかけとして一番多く思い出されたのは、友人関係をめぐる問題、ついで学業の問題、教師との関係をめぐる問題となっている。教師と生徒の間で認識の違いがあるが、生徒の感じている友人関係の難しさや、学業の問題、教師との関係も、学校が改善のキーを握っていると言える。つまり、学校、教師が児童生徒の視点で考え、いかに支援するかが大切になってきている。

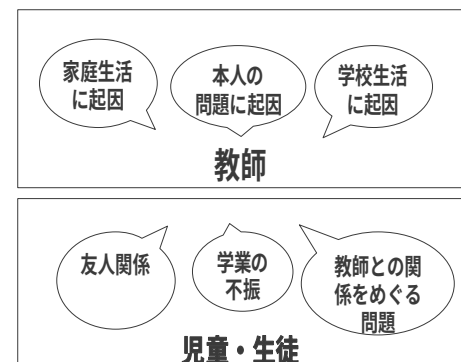


図1 不登校のきっかけ

2 研究目的

友人関係、教師との関係をめぐる問題も人間関係の問題と捉えることができる。そこで、不登校を予防するためには、早期に適切な対応を行うことと、児童一人一人にとって居心地のよい学級づくりが大切となってくる。しかし、昨今の児童生徒の多様で複雑な状況の中、不登校の早期発見・早期対応や居心地のよい学級づくりも、担任一人に任せきりでは効果があがらない状況がある。

そこで、仲間づくりをT.T.で取り組み、複数の教師によるかかわりが、居心地の良い学級づくりにもたらす効果を探り、校内でどう連携していくか、関係機関とどのように連携していくかなどチーム支援のあり方について研究していくことを通して、不登校の予防につなげることを目的とした。

3 研究内容

(1) 人間関係づくりの手法の研究

現代の児童生徒は一人一人ばらばらで集団として組織できない状況が見られる。また、核家族化が進み、家庭が地域や人的つながりから孤立している場合も見られるようになってきた。そうした中で、集団でいることを好まない児童生徒が見られるようになってきた。そこで、児童生徒の中に人間関係づくりを意図的に行っていく必要性を感じた。

現在、以下にあげられる人間関係づくりの手法が学校現場に取り入れられてきている。

① 構成的グループエンカウンター（以下 SGE）

ふれあいと自我発見を目標とし、個人の行動変容を目的としている。原理として、あるがままの自分のこと、つまり本音に気づき、気づいた本音を表現し、他者の本音を受け入れることがあげられる。また、エクササイズは参加者の心理面の発達を促す課題であり、自己開示の誘発剤となり、自己開示はリレーションを形成することになる。シェアリングは認知の拡大・修正をねらいとしている。

② プロジェクトアドベンチャー（心の冒険活動）

プロジェクトアドベンチャー(以下 PA)は基本的要素として、信頼関係の確立、ゴールの設定、チャレンジ、ストレス、試行体験、楽しさ、問題解決をあげ、アドベンチャーの持つ性質を人間の成長に生かそうとするものである。自然の中だけで行うものではなく、日常の中でも未知の世界に挑戦するアドベンチャーを多く体験することができることから、この考えを学校現場に生かしていこうとするものである。身体を使ったアクティビティをグループで行っていき、身体的な信頼関係を築き、心理的・社会的な信頼関係に発展させていくこともできる。

③ ソーシャルスキルトレーニング

ソーシャルスキルとは「良好な人間関係をつくり保つための知識と具体的な技術のコツ」のことである。ソーシャルスキルトレーニングは、精神医学、教育学、特殊教育、犯罪学などの幅広い領域で独自に展開されてきた。したがって、定義も領域や理論によって異なる。教育の分野では、人間関係についての基本的な知識や、他者の思考と感情の理解の仕方、自分の思考と感情の伝え方、人間関係の問題を解決する方法をインストラクション（言語的教示）、モデリング、リハーサル（ロールプレイ）、フィードバック、定着化を通して獲得していく。しかし、教え込むのではなく、楽しく人とつきあう方法を学ぶことであり、導入に意欲を引き出す工夫が必要である。学級の人間関係が乱れている場合は集団でソーシャルスキル教育を行うことには慎重であるほうがよく、教師と子どもの関係がうまくいっていない状態では、難しい。学級集団で行う場合は、人づき合いの楽しみ方を学ぶ「開発的レベル」と、「問題回避レベル」、「早期発見対応レベル」で活用することができる。早期発見対応レベルでは、トラブルが起こった場合にも個別でソーシャルスキルトレーニングを行うことができる。子どもたちが学んでいて良かったなど感じられるような活動であり、子どもの実態に応じた活動で、問題を解決するために必要なスキルを意図的に学ばせることをねらっている。

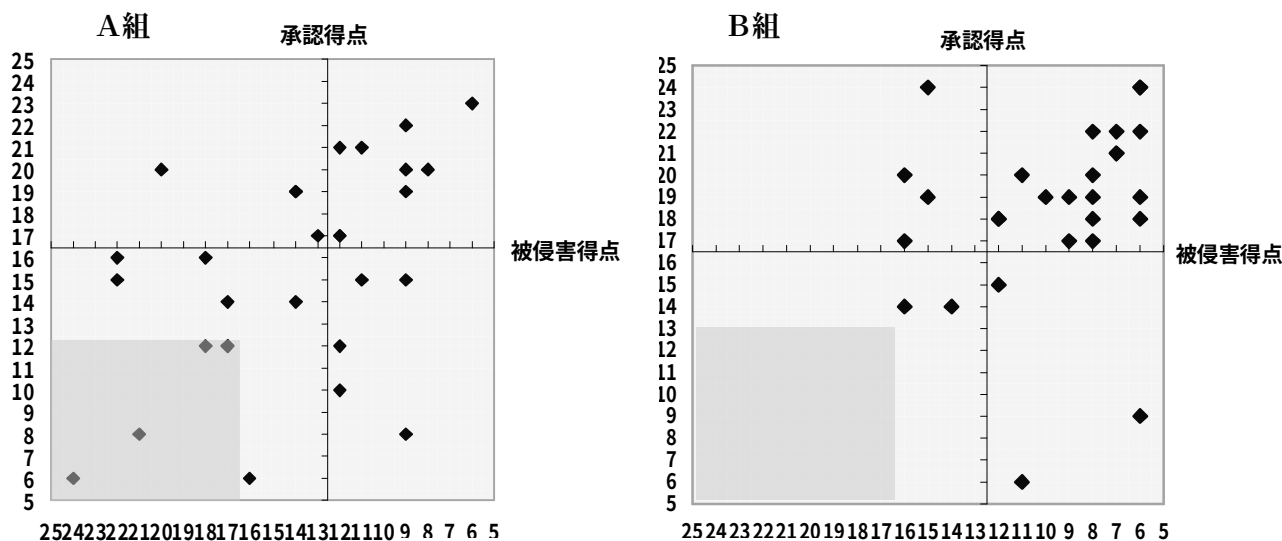
どのような人間関係づくりの手法を使う場合でも、学級の状態の把握が大切になる。人間関係が浅い場合では不安や緊張が高く、心の安全が保障できない場合も考えられる。どの人間関係づくりの手法を使うにせよ、児童の状態にあったものを選択し、工夫していく必要がある。

(2) 実践研究

小学校5年生の全2学級で人間関係づくりが居心地良い学級づくりに及ぼす効果を探った。Q-Uアンケートによる実態把握を行い、学級にあった人間関係づくりの手法を検討し、仲間づくりの授業をT.T.で取り組んできた。

① 6月のQ-Uアンケートを使った実態把握とアセスメント

児童個人の学級生活満足度と、学級集団把握、学級集団と個人の関係が客観的に把握できるQ-Uアンケートを活用した。



- A組は四つの群に拡散したプロットとなっており、友だち同士の関係づくりと、ルールの確立が必要であった。

個別対応が必要な児童が多く、理解の程度に差があるので、配慮の必要な児童に対して個別のかかわりを多くもっていくようにした。

- 学級生活満足群が68%あり、学級生活を主体的に送ろうとする意欲にみなぎった状態であるが、配慮の必要な児童を取り巻く集団づくりに課題を持っていた。

承認得点の低い児童へのかかわりを多くすることと、取り巻く児童に焦点を当てるようにした。

② 活動のねらい

児童の日常の観察とQ-Uアンケートによる結果から活動を組み立てた。元気な男子が多く休み時間も外に飛び出す児童が多い。両組ともルール作りや、基本的な学習規律の再構築が必要であった。1学期はゴールの設定、ルールの確立がグループワークを通して行えるPAを導入に取り入れた。ルールを守ると楽しい活動とすることができることを初期のねらいとして取り組んだ。日常、学級担任が学級のルールづくりに取り組んでいる。しかし、人間関係づくりの場でルールの確立をT.T.で取り組むことは、担任がT2として児童の動きを観察できるので客観的にルールの確立や実態把握が行いやすくなる。

また、児童の成長過程で内面のふれあいのある関係を築くことは大切である。内面のふれあいを体験することはPAにもできる。しかし、今回限られた授業時数で実施したので、一つのエクササイズで児童の実態に合わせた内面のふれあい体験に工夫がしやすいSGEのエクササイズを取り入れ、アレンジして取り組んだ。内面のふれあい体験の活動から、児童同士の見方を固定したものでなくいろいろな面に気づくことをねらいとした。

表1 実践活動

日時	活動	目標	内容	教科
5月 27日	プロジェクトアドベンチャー	協力のスキルを理解する	ジャンケン おにごっこ ラインナップ ビーイング	体育
5月	Q-Uアンケート調査	学級の実態を把握する		学級会
6月 10日	プロジェクトアドベンチャー	ルールを守ることを意識する	ラインナップ・キャッチ・ビーイング おにごっこ	体育
6月 30日	集団宿泊 合宿	協力し合って楽しく活動する	スタンプ・飯盒炊飯 追跡ハイキングなど	特別活動
7月	Q-Uアンケート調査	学級の実態を把握する		学級会
10月 6日	構成的グループエンカウンター	相互にふれあう中で信頼関係を深める	ジャンケン・なんでもバスケット みんなの窓 (トラストアップ)	学級会
10・11 月	プロジェクトアドベンチャー	簡単なふれあいのある活動を通して信頼関係を作る	トラストアップ インパルス・ビート フープ送り おてだまおくり 東西南北	体育
12月 8日	構成的グループエンカウンター	相互にふれあう中で信頼関係を深める	ネームトス 私の四面鏡	学級会
12月	Q-Uアンケート調査	学級の実態を把握する		学級会

A組
友だち同士の関係づくり
ルールづくり
↓
1対1、簡単なルール
繰り返し、みんなでやると
楽しい活動

B組
信頼関係づくり
↓
1対1、2対2、4対4
集団活動、互いに協力
信頼感、達成感を感じられる活動

③ 授業の実際

第1回

5月の活動は協力のスキルである、互いに力をあわせて努力すること、自分や他人の安全に注意すること、ルールを守ること、みんなで楽しむことなどを理解することをねらいとした。PAの要素であるゴール設定と約束(ビーイング)を生かした活動を行った。聞くことのスキルの確立やルールを守ろうとするが意識だけで終わっているなど担任が日常感じている点が客観的に捉えることができ、課題が明確になった。基本的スキルの育成が必要であったが、注意や活動の進行をT1が行い、担任は仲間づくりの授業で児童との信頼関係を築くために、褒めることと励ましを中心に行った。

第2回

6月は協力のスキルを使って、活動すると楽しい体験を取り入れてきた。前回の活動のなかで使ったゴール設定と約束(ビーイング)を利用した。前回と同じ活動を入れたことで自分たちの成長を感じることができた。担任がT2として、グループに入りにくい児童に対していっしょに活動し、声がけをし、感情をほぐすように働きかけた結果、「3回くらいやったら楽しくなった。」と言った感想が得られた。担任は援助の必要な児童を褒めようとするのだが、ルール違反などが目に付き褒められないと感じた。しかし、一緒に声をかけながら動くことで児童が笑顔になったとふりかえることができた。また、児童同士のかかわりに焦点を当て観察し、日常と違う人とのペアリングに注目することができた。

第3回

10月は内面的なふれあいに注目してSGEを取り入れてきた。しかし、元気な男児が多く休み時間も外に飛び出す児童が多いので、ゲーム的な要素を含むエクササイズで、自分を知ってもらうこと、友だちを知ることの楽しさを味わうことをねらいとした。日常活躍していない児童やQ-Uアンケートで承認得点の低い児童に焦点が当たるようにエクササイズの内容をアレンジした。担任との話し合いから、承認得点が低いけれども家で兄弟の面倒を良く見ている児童や、我慢をしている児童に焦点が当たるような内容で「何でもバスケット」を行った。振り返りカードより96%の児童がとても楽しかった、楽しかったと感じることができたことが分かった。「友達の意見や考えを聞くことができましたか」の設問に98%の児童ができた、よくできたと感じることができた。「これで友達と仲良くできそうになりました。」「あまり話さない人と話せて嬉しかった。」などの感想があり、友達づくりのきっかけになったと言える。この活動で児童の個人と個人の関係が新しく変化していることが分かった。グルーピング活動の観察から、個別児童の支援のために周囲の児童に焦点をあてたふれあい活動をいっそう進める必要を感じ、10、11月の体育の活動にも信頼関係を作る活動を取り入れた。

第4回

SGEに取り組んだ。互いによいところを考えることで、認め合い、一人一人の存在を大切にしようことをねらいとした。事前にアンケートをとり、友達のよいところをあげてもらいワークシートを作成し、どの児童にも抵抗感が少なくなる工夫をした。「私の四面鏡」で相手のよいところをシートに丸をつけるというエクササイズを行った。良いところを見つけることができにくい児童に対して担任がT2として目立たないようにそばにいき支援を行った。目の前でよいところをチェックし渡すことができた。しかし、8%の児童が友達のよさを発見できなかったとふりかえりて回答しており、日常的に、良さを発見する練習を帰りの会で取り入れるなど育てる工夫が必要であったことが分かった。「自分が知らないところも友達が知っていてくれて良かった。」「自分にはいいところがあったので良かった。」「人のいいところや、自分のいいところをこれからもどんどん見つけて行きたいです。」などの感想があり、友達づくりのきっかけになることができたと言える。エクササイズの進行はT1が行い、担任がT2として信頼関係づくりを中心に行った。トラブルが起こったときにすばやく担任がかかわることができすぐに活動に入ることができた。

④ 児童の変化

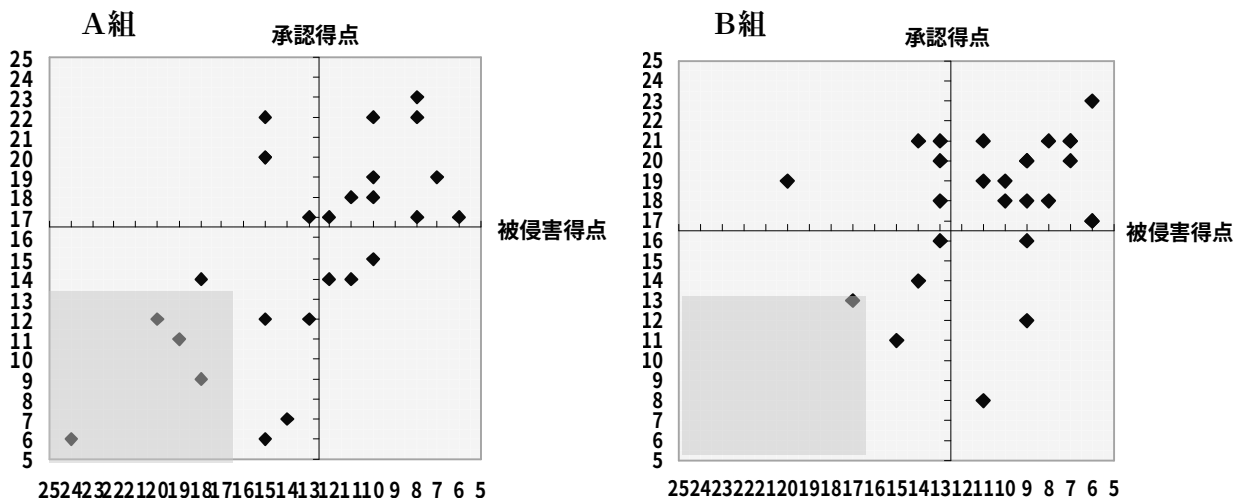


図3 2月のQ-Uアンケート

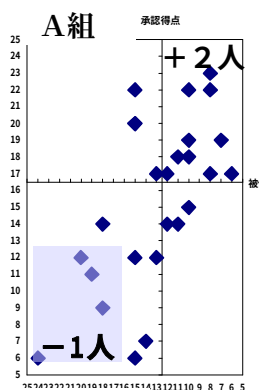


図4 Q-U

個別の対応に注意しながら担任がかかわり、仲間づくりの授業でも声をかけていくなど、対話を意識した結果、わずかであるが学校生活満足群の増加と学校生活不満足群にいる児童の減少が見られた。変化のない児童には個別の支援会を行いスクールカウンセラーや他機関との連携が行えた。

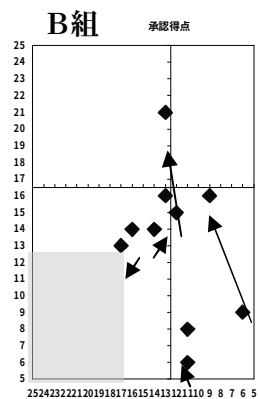


図5 Q-U

承認得点の低い児童に対して、担任が日常の中でも細かい学習の手立てを用意し、仲間づくりの授業でも集団の一員としてみんなが取り組んだからこそ成功した体験を取り入れたことで、承認得点が向上したのではないかと考えられる。

仲間づくりをT.T.で取り組むと複眼で児童を見ることができ、指導方法の修正を行うことができた。しかし、今回仲間づくりに取り組んだ良さとして担任が感じたことは、人間関係づくりの授業についての事前、事後の話し合いで、担任自身が児童への対応を整理して考えることができたことが一番にあげられた。児童と担任の信頼関係づくりにはT2としてのかかわりが対応の幅を広げることになった。しかし、児童にとっても自他理解や友達づくりのきっかけにはなったが、個別に支援の必要な児童に対しては、計画された仲間づくりの授業だけでは十分な支援にはならなかった。細かい個人の援助計画と、タイミングの良い支援が必要であった。人間関係づくりの授業でできる、児童同士のかかわりを見取る力を、T1、T2と高めあい、次の手立てに結びつける必要があった。

(4) 校内チーム支援

居心地の良い学級づくりをT.T.で取り組むと共に、校内チーム支援について考察してきた。Q-Uアンケートをもとに検討していると支援の必要な児童に対して個別に対応する必要がでてくる。所属校では月一回程度の児童支援会を行い担任だけでなく全教職員で支えていこうとする話し合いが行われている。児童支援会から個別支援のケース会に移るときに有効であった点は、担

任、管理職、保護者との話し合いの場に教育研究所の指導主事の参加が得られたことである。保護者、担任、学校それぞれの考えがあるが、校外の援助者(教育研究所)がそれぞれの感情の整理を行い、これからの対策を考える上でのコンサルテーションを受けることができた。しかし、支援体制をとってからの具体的ななかかわりとその評価、修正を行い、より有効な支援につなげていくことが課題になった。

高知市内は小学校全41校中17校(41%)の学校(2004₃)が定期的に児童支援会を実施している。高知市内の先進校の取組では、スクールカウンセラーや専科教員、前担任、障害児学級担任の参加による支援会の開催や、2, 3人寄れば支援会といった支援会の日常化が図られている学校があり、それぞれの学校が工夫した取組を行っていた。

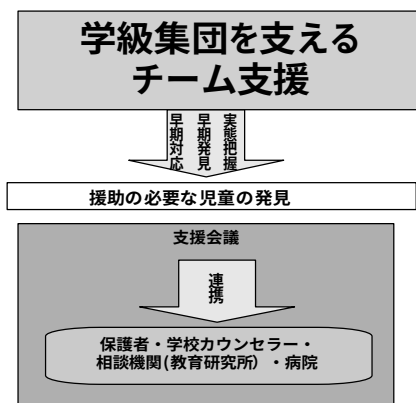


図6 他機関との連携

(5) 早期支援

児童の問題を長期化させず予防的にかかわるために学級のSOSサインを見逃さないためのチェックリスト(表2)が有効ではないかと考えた。これを支援会での資料として活用していくことで、早期にチーム支援を行うことができる。

早期であれば人間関係づくりをT.T.で行い、ルールづくりとふれあいのある活動に焦点を当てて取り組むことで問題を長期化することを防ぐことができると考えた。また、どの教科でも導入として人間関係づくりを教科T.T.と取り組むことができ、あるいは、学年T.T.を行い複数の教員で予防に取り組めると考えた。

また、学級の SOS サインを見逃さないためのチェックリストを活用し、個別児童の SOS サインの気づきにつなげることができるのではないかと考えた。

表2 **学級のSOSサインを見逃さないための
チェックリスト**

—校内で早期支援するために—

- ① 保健室への来室が多くなる
- ② 行動がルーズになったり、教師に対する態度に変化がある
- ③ けんかや悪口などのトラブルが増える
- ④ 係活動や掃除が雑になっている
- ⑤ 整列や移動する列がばらばらになっている
- ⑥ 掲示物や公共物が乱れたままになっている
- ⑦ チャイム、下校など学校の基本ルールが守られていない
- ⑧ 特別教室やトイレなどを溜まり場としてひそひそ話をしている

「学校心理学」石隈利紀・「学級崩壊予防・回復マニュアル」河村茂雄 参考

(6) 先進校の視察

不登校予防に何が有効か考察するために、不登校対策アクションプラン、魅力ある学校、学級づくり推進研究校に視察を行った。(2005₄)

横浜市立杉田小学校

研究テーマ

互いのよさを認め合い、豊かな人間関係づくりをめざして
—授業実践を通した支えあう学級づくり—

初年度「児童理解とその手立てについての研修」、本年度は「授業を通して、人間関係づくりをする」に取り組んでいる。

研究実施	16 年度	○Q-Uアンケートをもとにした研究	8 回
		○構成的グループエンカウンター研修	5 回
		○役割演技体験（ロールプレイ）	2 回
		○教師のためのソーシャルスキル学習	1 回
	17 年度	○公開授業研	全 19 クラス
		○Q-Uアンケート結果分析と対応策	3 回

第6回公開授業後の研究会では児童のかかわりや、教材と児童とのつながりや、個別の児童に対してどうかかわりが大事なのかについて中心に討議が行われた。授業者からも他の先生からアイデアをもらいながら互いのつながりを作っていくように意識してきたことや、グループ学習で、小グループから中グループ、全体への人間関係に注目してきたことが出された。

講師（東京聖栄大学助教授岡田弘）からも教師同士の知恵や工夫への講評があり、「今ここで」起こっていることを大事にし、同僚同士、自分の知っている姿と、自分の知らない姿を返していくことが大切であると話された。また、フラストレーションマネジメントを学級の中で行っていくことや授業の中で教師が自己開示していくことで子どもと教師の距離を縮めることや、担任自身の癖を理解し、指導に生かすことなどがアドバイスされた。

また、研究主任から有効だった取組を聞くことができた。学校のルールの見直しを行い、一つ一つのルールを徹底させ全校で取り組み、教師の個性は尊重しながらもルールに関しては例外を作らないで指導していくことが有効であったようだ。また、研修にも全校教職員で取り組み、学年の出

来事は、学年みんなで取り組むといった行動連携が取られていた。

研究校の取組から、豊かな人間関係づくりのためにQ-Uアンケートをもとに学級集団の傾向をつかみ、具体的な手立てを考え取り組むことと、教職員同士互いに学びあい高めあうことが有効であることが分かった。併せて、講師によるコンサルテーションが話し合いに効果的であることが分かった。

4 まとめ

人間関係づくりをT.T.で取り組むことは、児童にとって自他理解の深まりや、コミュニケーション能力の向上、友達づくりのきっかけとなり居心地の良い学級づくりに有効であることが分かった。教員にとっても、複数での教員のかかわりは学び高めあう基礎となる。人間関係づくりを複数教員で取り組むためには、児童の実態把握を客観的に行う必要があり、多様なかかわりを持つことができた。現在の児童の問題行動は教師の指導と児童の実態とのミスマッチから起こる場合もあり、児童の側に立った視点をもつことの重要性が高まっている。人間関係づくりの手法も目の前の児童に合った活動でなく、教師の目的に合わせた活動であれば児童に抵抗や不満足感が残り、ルールづくりやふれあいのある関係ができない状況もでてきた。本研究では、児童に有効な人間関係づくりの手法を選択し、目の前の児童の実態に合わせる活動を工夫し、実施することができた。そして、Q-Uアンケートをもとに児童のアセスメントを行うことを通して互いに学びあい高めあう関係づくりができた。不登校の予防のためには、このようなT.T.の関係を全校に広めることが有効であると考えられる。

先進校の取組からも全校での学びあいが有効であることが分かった。熊谷市の不登校半減計画の取組からも、児童一人一人の指導の工夫を考え個票に記述する文字数の多さが、欠席日数を減らした教員に共通することが報告されている。また、個票には学校関係者の記載する自由記述欄が工夫されており、各児童に対して、担任の記述欄とともに、スクールカウンセラー、校長の記述欄があり、今後の手立てを書くようになっている。学校関係者同士がかかわるチームを作りやすく、チームでのかかわりが意識化されるよう工夫されている。個別支援のために今後このような個票を導入し、学びあいの関係を広げ校内の意識を高めていくことが不登校予防に有効な手立てであると考えられ、今後の課題としてさらに取り組んで行きたい。

[主な引用・参考文献]

- 1) 文部科学省 「平成 16 年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題についての調査」(2005 年)
- 2) 現代教育研究会 代表森田洋司 「不登校に関する実態調査」 (2001 年)
- 3) 高知市立小学校 研究集録 (2004 年)
- 4) 横浜市立杉田小学校 研究紀要・研究会資料 (2005,2004 年)
- 5) 小林正幸 「学級再生」 (講談社現代新書 2001 年)
「教師のための不登校サポートマニュアル」 (明治図書 2005 年)
- 6) 國分康孝他編 「構成的グループエンカウンター事典」 (図書文化 2004 年)
- 7) 國分康孝監修 小林正幸他編著 「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校」 (図書文化 1999 年)
- 8) ディック・ブラウヂディ他 「アドベンチャーグループカウンセリングの実践」 (みくに出版 1997 年)
- 9) 小貫悟他 「LD・ADHD へのソーシャルスキルトレーニング」 (日本文化科学社 2004 年)
- 10) 石隈利紀 「学校心理学」 (誠信書房 1999 年)
「チーム援助入門」 (図書文化 2003 年)
- 11) 河村茂雄 「学級崩壊予防・回復マニュアル」 (図書文化 2000 年)
「Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド」 (図書文化 2004 年)
「グループ体験による学級育成プログラム 小学校編」 (図書文化 2001 年)